

後輩

2023.9.24

高校に入り、軟式庭球（ソフトテニス）部に入った。中学のときにやっていたことを高校でも続けることにした。部活動をやらずに勉強に専念するという選択肢もあった。だが、自分にはそんなことは無理だと判断した。

期待感に胸を膨らませてテニスコートにいった。しばらくすると、状況がわかってきた。強い部ではない。練習も、これでうまくなれるのか、試合で勝てるのかというものだった。練習メニューは部長が決めていた。

最初の大会になった。他の高校を見た。全然違った。案の定、自分の学校は勝てなかった。レベルの違いに愕然とした。意欲満々に高校の部活動を始めたが、徐々に意欲は失われていった。最もモチベーションが低かったのは、1年生の冬だろうか。気温が下がり、雪が降れば、テニスコートは使えず、シーズンオフとなる。自分の中で部活動の占める割合は下がっていった。

2年生になり、どんなことを考えたのかは忘れてしまったが、気持ちを入れ直した。勝ちたい、うまくなりたいたいという気持ちが残っていたのだろう。それにもまして、勉強ができなかったことが大きい。部活動をやるしかなかった。そこにしか、高校での自分の存在意義を見いだせなかった。

夏になり、ようやく試合で勝てるようになってきた。それは、ペアの存在のおかげである。一つ下の後輩とペアを組んだ。1年生の頃とはうってかわって練習もした。先輩が引退したことが大きかった。自分たちの代になり、部の体質を変えた。勝とうとした。後輩もついてきてくれた。

秋になり、結果が出た。県大会に出ることになり、泊まれるだけでみんな大喜びだった。さほど考えもせずに、試合をした。すると、どんどん勝っていった。決勝リーグに残ってしまった。波に乗っていた。あわや優勝という寸前までいった。結果は3位だった。十分な結果だった。

それからは、さらに練習に身が入った。県のレベルもわかった。明らかな目標ができた。1年前と比べると、劇的な変化である。同級生にも恵まれたが、後輩の存在が大きかった。このメンバーの中には、私と同様に教員になった人もいる。中学校の国語の教員もいる。私の同業者である。あの頃は、二人とも、将来教員になることなど想像もできなかった。それが、今では一緒に仕事をしているから不思議である。あの頃のかわいい後輩に、今では一番お世話になっている。これも縁であろう。

高校時代の我が部から教員になった先輩、同級生、後輩がいる。よくぞ、皆さん、立派になったものだと思う。中学時代のつながりもそうだが、高校でのつながりは大きい。同じ高校というだけで仲間意識のようなものが生まれる。同じ部活動であれば、なおさらである。先輩と後輩の関係は重要である。

弱かった部活動からスタートしたが、後輩たちがつないでくれて、強い部へと変貌を遂げていった。後輩たちの活躍はうれしいものである。自分の教え子が、私と同じ高校に進み、ソフトテニスを続け、全国大会に出場したりすると、うれしさも格別である。先輩の存在は大きい。一方、後輩のそれには、また違った味わいがある。後輩は、いつまでも大切にすべきものである。